

アスリートがドーピングを行わなかったことに影響した要因に関する研究
ーオリンピックメダリストを対象とした質的検証ー
Study on factors that influenced athletes' decision not to dope
: Qualitative evidence from Olympic medalists

スポーツクラブマネジメントコース
5014A321-4 日比野 幹生

研究指導教員：間野 義之 教授

1 序論

スポーツ基本計画では、国際競技力向上に係る政策目標として、「オリンピック競技大会金メダル獲得ランキングについては、夏季大会では5位以上、冬季大会では10位以上をそれぞれ目標とする。」と定めている。2013年9月には、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市が東京都に決定し、国民のメダル獲得に対する期待はこれまで以上に高まっている。一方、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の招致において、日本のアスリートたちは世界に向けて『ドーピング0宣言』を行い、日本のアスリートからはドーピング防止規則違反（以下、「ドーピング」という。）を一人も出せない状況にある。これまで、国際競技力向上を推進する強豪国ではドーピングが起きているが、日本では意図的なドーピングは少ない状況である。今後、日本では2020年に向けて強豪国と同様に国際競技力向上が推進され、アスリートには国費をはじめとする資金が投入されるとともに、金メダルを獲得する重責と期待によるプレッシャーが高まると考えられる。そして、これはこれまでになくドーピング・リスクが高まることでもある。

1.1 先行研究の動向

諸外国では、アンチ・ドーピングに関する研究が盛んに行われてきた。例えば、Bette & Schimank (1995)、Waddington & Smith (2009)、Bloodworth & McNamee (2010)などはドーピングが起こる仕組みやリスク要因に関する研究を行っている。世界アンチ・ドーピング機構（以下、「WADA」という。）はドーピングのリスク要因だけでなく、アスリートがドーピングを行わないことに関する研究が重要とのことから、2012年には「アスリートはなぜドーピングに『ノ』ーと言うのか」をWADAターゲット研究と位置づけ同種の研究を奨励している。このWADAターゲット研究には、Dave et al (2012)が選定され、アスリートがドーピングを行わないことに関する研究が行われている。この他、同種の研究としてはErickson et al (2014)がアスリートのドーピングからの保護要因に関する研究を行っている。これまでの研究の成果は、新たなアンチ・ドーピング方策を模索する中で貴重な知見となっている。しかし、これまでの研究では、最も競技レベルが高くドーピング・リスクが高いオリン

ピックメダリストを対象とした研究が行われていないこと。アンチ・ドーピングに関する研究は地理的・文化的な違いを考慮した研究が必要であるが、これまでの研究は英国のアスリートを対象とした研究のみであること。加えて、同種の研究自体が希少であることから未だ明らかになっていない要因があると考えられることなど、十分に研究が行われているとは言えない。

1.2 研究の目的

先行研究の動向から、本論では、日本のオリンピックメダリストがドーピングを行わなかったことに影響した要因を明らかにすることを目的とする。

2 研究方法

2.1 対象

対象者は、オリンピック競技大会においてメダルを獲得した元アスリート12名とした。アンチ・ドーピングの諸条件を統一するために、WADA codeが適用となったアテネオリンピック競技大会以降でメダルを獲得した元アスリートとした。

対象競技は、高い競技レベルで統一するためにアテネオリンピック競技大会以降で2大会連続でメダルを獲得している競技とした。

2.2 データ収集

データは、半構造化インタビューを行い、ボイスレコーダーにより音声記録した。インタビューは1時間程度で1人に対して1回実施した。

2.3 分析方法

対象者の記録した音声の文字起こしを行い、分析ソフトウェア MAXQDA11 を使用しテーマ分析法により分析を行った。

3 結果

本研究では、ドーピングを行わなかったことに関連している文脈を対象として分析を行った。この結果、本研究の対象となる253の意味単位が抽出された。これの意味単位は48のサブテーマに分離された。更に、これらは【個人の道徳的スタンス】、【広い視野に立った判断】、【内発的モチベーション】、【課題志向性】、【レジリエンス】、【親による教育】、【指導者による教育】、【日本の社会の評価】、【日本のフェアプレイ文化】、【安心した競技スポーツ環境】、【メダル獲得の金銭的評価】、【禁止薬物・方法の入手環境・知識】の12のメインテ

ーマに分類された。メインテーマは、要因の性質から『個人的要因』、『社会環境的要因』に分類された。

4 考察

先行研究から競技スポーツでは競技レベルが高いほどドーピング・リスクも高く且つ複数のリスクが関係することがわかっている。このことから、本研究で最も競技レベルの高いオリンピックメダリストがドーピングを行わなかったことに影響した要因を抽出したことは、現在最もアンチ・ドーピング対策に苦慮しているアスリートに有効なエビデンスを得たことになる。以下、ドーピングを行わなかったことに影響した要因について、『個人的要因』、『社会環境的要因』ごとに考察する。

4.1 個人的要因

個人的要因として、【個人の道徳的スタンス】、【広い視野に立った判断】、【内発的モチベーション】、【課題志向性】、【レジリエンス】が抽出された。

「ドーピングを許さない信念」、「ドーピングを行わない態度」などからなる【個人の道徳的スタンス】、「自分の将来展望」、「ドーピングをした時のことを考えた判断」などからなる【広い視野に立った判断】は、ドーピング・リスクがある中、オリンピックメダリストのドーピングに対する信念・評価・態度に直接関連する重要な要因であると考えられる。これらの要因は、本研究の最も競技レベルの高いオリンピックメダリストだけでなく、国内・学生レベルのアスリートを対象とした先行研究でも抽出されていることから、競技レベルに関わらずドーピングを行わなかったことに影響した要因となっていることが示唆される。

「自ら競技に打ち込む姿勢」、「有能感の認知」などからなる【内発的モチベーション】、「プロセスの重視」、「努力する姿勢の重視」などからなる【課題志向性】、「競技による人間的成長」、「苦しいことへの自主的態度」などからなる【レジリエンス】は、いずれもドーピング・リスクがある中でオリンピックメダリストの競技への向き合い方に関連する要因であると考えられる。競技スポーツは、自らの能力と技術の限界に挑む活動であり、様々なストレス状態の中で競技力を向上しなければならない。オリンピックメダリストという最も高い競技レベルであるアスリートにおいては、競技への取組に直接関連するモチベーションや能力が重要なドーピングを行わなかったことに影響した要因となっていることが示唆される。

4.2 社会環境的要因

社会環境的要因として、【親による教育】、【指導者による教育】、【日本の社会の評価】、【日本のフェアプレイ文化】、【安心した競技スポーツ環境】、

【メダル獲得の金銭的評価】、【禁止薬物・方法の入手環境・知識】が抽出された。

「親による道徳教育」、「親による努力する姿勢を重視した教え」などからなる【親による教育】、「指導者による人間教育」、「指導者による努力する姿勢を重視した教え」などからなる【指導者による教育】からは、信頼関係のある身近な関係者が重要な役割を果たしていることがわかる。これらのことは、オリンピックメダリストの子どもころからトップレベルに至るまでの育成の各過程でみられた。このことから、ドーピングの未然防止の観点からするとアンチ・ドーピングにつながる適切な教育や経験はアスリートの育成の各過程に渡って行われることが望ましいと示唆される。

「世間の目」、「世間の怖さ」からなる【日本の社会の評価】、「日本人のルール遵守の精神」、「日本人の公正さ」などからなる【日本のフェアプレイ文化】は、社会規範としてオリンピックメダリストに影響している。アスリートが競技活動を行うにあたっては、各国・地域の社会規範の影響を受けると考えられる。短期間に社会規範が急激に変化することは考え難いが、ドーピングの未然防止の観点からすると長期的にはアスリートの意識などを通して社会規範の影響を把握することが望ましいと示唆される。

「競技成績のノルマがない競技活動」、「セカンドキャリアの保障」などからなる【安心した競技スポーツ環境】、「メダルによる生涯の保障がないこと」、「報奨金の少なさ」などからなる【メダル獲得の金銭的評価】、「禁止物質・方法の入手環境がないこと」、「禁止物質・方法の知識の少なさ」からなる【禁止薬物・方法の入手環境・知識】は、オリンピックメダリストの競技スポーツ環境や処遇などに関連する要因である。これらは、必ずしも恒常的なものではなく、アスリートの所属先やスポンサーとの契約内容、報奨金の金額、トレーニング拠点が海外となった場合などでは、要因としての機能も変化する可能性があると考えられる。このことから、ドーピングの未然防止の観点からするとアスリートの競技スポーツ環境や処遇などの変化には注視する必要があると示唆される。

5 結論

本論では、これまでに明らかになっていない日本のオリンピックメダリストがドーピングを行わなかったことに影響した要因が明らかになった。本論での成果は、オリンピックメダリスがなぜドーピング防止規則を遵守してドーピングを行わないのかを理解することに貢献した。このことは、2020年東京オリンピック競技大会を含め今後国際競技力向上が推進された場合などにおけるアンチ・ドーピング方策上の有益な情報となり得ると考えられる。